

「羅針盤」vol.22 校長 白岩博明



72年続く、弁論大会を終えて

本校は1941年4月、私立広島商業実践女学校として開校しました。その7年後の1948年に弁論部が創部され、以来72年間（途中、中止の時もあったかもしれませんが）、弁論大会は継続して行われてきました。誇れる伝統行事と言っても過言ではないでしょう。12月19日（木）に中学校、20日（金）には高校の弁論大会が行われました。身の回りのことから地球環境のことまで取り組んだテーマは様々ですが、心揺さぶる内容とクラス代表としての弁士の姿に敬意を表するばかりです。

以下は、21日（土）の終業式前に発表した、中学校、高校各学年の最優秀弁論の要旨です。

◆中学校：「平等な世の中へ」（3年 中川 悠）

先日、英語の授業で人種差別について学習した。ある黒人女性がバス内で不当な扱いを受けたという内容だった。これはアメリカでの話だが、日本にも障がい者への差別などさまざまな差別がある。差別するということは、その人の生き方を否定しているということ。すべての人が平等であるためにはどうしたらいいのか。まずは知識を増やすこと。現状を理解すること。そして、思いやりの心を忘れないこと。誰かが端っこで泣かないように地球は丸くできている。だから、近くで苦しんでいる人を助け、苦しんでいることに気づいてあげたい。

◆高校1年：「存在肯定」（塚前柊南）

9月1日、この日は自殺の日とも言われている。原因は学校での問題、家庭での問題などさまざまなことがあるのだろうが、同世代の人たちが命を絶つことに目を背けてはならない。辛い時や死を選択しようとしたとき、命は大切だ、死んではだめだと何万回言っても本人には響かない。それよりも「あなたは大切だ。あなたは何にも代えられない大切な存在なんだよ」と、一人のかけがえのない存在であることを身近に感じるからこそ一番人を強くさせると思う。そんなふうになんか残る声やメッセージこそが命を救うのではないだろうか。

◆高校2年：「貧困の正体」（田村彩夏）

「貧困な人とは少ししかものを持っていない人ではなく、無限の欲がありいくらあっても満足しない人のことだ」と、ホセ・ムヒカ元ウルグアイ大統領の言葉を聞いて、今までの「貧困」に対する考え方が180度変わった。私たちは更なる発展を求めて自然を破壊し資源を大量に活用して、今の便利な生活を手に入れてきた。しかし、発展が幸せと逆方向にあってはならない。現在、貧困や教育など持続可能な開発目標が国連で決められている。貧困に苦しむ人たちが現在の状況から抜け出し、幸せを実現する方向に向かうことを強く望む。

◆高校3年：「男女のあり方」（日戸美里）

「女のくせに」「男のくせに」と、多くの人がこの言葉を口にしたり耳にしたりしたことがあるのではないか。この言葉が男女差別であることをどれほどの人が知っているだろうか。女性差別の問題事は事欠かないが、「レディースデー」などに見られる男性差別も存在することも忘れてはならない。数多くの差別が存在するこの世の中、男性にとっても女性にとっても生き辛い。しかし、男女平等を謳いながら、時として「女だから」「男だから」と言い訳するのではなく、男女それぞれの能力を活かして共生していくことが重要である。

それぞれが想いを込めて発表してくれました。また、高校1年の弁士が当日欠席だったため、急遽、男子生徒が代読してくれましたがとても素晴らしいものでした。2日間の弁論大会とこの日の発表、弁士の姿と聴く側の態度から、生徒たちの未来に向けての大いなる可能性を感じるときとなりました。